

アジア・太平洋研究センター主催講演会 〈シリーズ「中国と向き合う」第1回〉

日 時：2021年11月18日（木）

場 所：南山大学 オンライン講演会

テーマ：習近平総書記が進める党大会への準備

報告者：高原 明生（東京大学公共政策大学院教授）

2021年度、アジア・太平洋研究センターでは、依然として新型コロナウイルス感染状況が落ち着きを見せず、対面による講演会が難しいこともあり、オンラインによる講演会を開催して学内外に発信することで学術活動の一環とした。本シリーズ「中国と向き合う」は、昨年度の「朝鮮半島を俯瞰する」に続くシリーズ講演会として企画され、さまざまな分野の中国専門家に講演していただき、国際社会でますます存在感を示す中国について従来とは異なるイメージを作り、いかに中国と向き合っていくのかについて考える機会を作ろうとするものである。

その第一回として東京大学公共政策大学院の高原明生教授に「習近平総書記が進める党大会への準備」とのタイトルでお話しいただいた。概要は以下の通り。

国力の伸長とともに、表に現れた中国の対外姿勢や対外行動がより強硬になったことは間違いない。だが実は、それらの根っ子の部分はあまり変わっていない。

一つは、力とカネの信奉だ。多くの中国人は「富民強国」、すなわち富国強兵パラダイムに囚われており、習近平が自画自賛するのは自分の領導の下で中国が強国になったことである。強ければ、そして豊かであれば、少々非難を受ける行動を起こしてもいずれ他の国々は中国になびいてくる——こうした認識が、機会をとらえ、まずは行動を起こして既成事実をつくり、後は新しい状況に慣れることを外交的に求める行動第一主義につながっている。

大国意識は、自分を客観視できない大国症候群をもたらす。多くの中国人は、なぜ自分たちが好かれていないのかわからない。中国は常に正しく、間違っているのはいつも外国の方だという報道に晒されていることがその一因だろう。習近平は、中華民族には他国を侵略し覇を称えるDNAはないというフレーズを演説の中でよく使う。本当にそう信じているのだとすれば、大国症候群は病膏肓に入る深刻さだと言わざるを得ない。

富国強兵パラダイムに囚われることは、近代化の過程で日本も経験済みだ。近代化

の過程で不可避的に生じる伝統と近代の相克が、まさにいま中国で起きている。その表れが、中国社会で見受けられる反西洋の気運の高まりであり、伝統回帰の風潮だ。

その結果、階級秩序観が頭をもたげている。大きな中国が地域の中心であり、他国は中国を仰ぎ見て、その意思や利益を尊重すべきだと言わんばかりの態度が目立つようになった。

最近の「戦狼外交官」たちの粗暴な発言からは、外交とは基本的に闘争だととらえる中国共産党の特徴的な発想も見て取れる。国際政治とはしのぎを削る大国間の競争であり、外交はそこで生存と発展を勝ち取る闘争だと理解される。

こうした観点から、今の中国外交は対米関係に注意を奪われている。外交の安定は内政の安定に直結している。最も重要な対外関係は唯一の超大国である米国との関係であり、ロシア外交についても同じことが言えるが、中国は米国との関係というレンズを通して世界を見る傾向が強まったように思われる。当然、実像が歪んで見える。

この傾向は日本に対する視線にも影響を及ぼしている。日本が採る安全保障政策や外交政策はすべて米国追随であり、日本外交に独自性はないと言わんばかりの単純な理解がその一つだ。そこからは、尖閣諸島海域で繰り返される領海侵犯や、東シナ海および南シナ海、そして台湾周辺における軍事的な圧力の高まり、そして新疆や香港における力まかせの弾圧に対する日本人の素朴な嫌悪への関心がまったく感じられない。

対米競争重視の観点からは、米国の同盟国である日本との闘争が当面の課題となる。だが安全保障上、日米を離間させることは一貫して中国の利益だと考えられている。そして長期的な米国との競争に勝利するためには、日本をいわば自陣に引き込むことが極めて重要となる。また経済的には、特に欧米との関係が悪化する状況下で、以前ほどではないにせよ日本はやはり大事な提携パートナーだ。

(文責：平岩 俊司)